

第9号

アクトス

文芸集団 ACTOS

平成二十三年二月

アラトスの夢の世界にたゆといし書籍の海の吾ひとしずく

大西 亥一郎

※アラトス(Alaios)は、紀元前三世紀に活躍した古代ギリシアの詩人。古代マケドニアで活躍した。ギリシア神話の記述者。

はじめに

文学は文楽である。

日記は、それが結果として自己以外の人の心に響くメッセージか否かによつて、文学と峻別される。言葉は命である。その言葉を、文学は文字という記号を媒体として表出する。記号である故に、その構成と判別に知性と経験が必要とする。とともに、組み合わせられた記号は、その記号以上の意味と感情を含み、一定の時間と空間に影響を及ぼすものとなる。

それを踏まえつつ、事実の伝達のみでなく人の思考・情感を伝えるもの、それが文学の誕生である。

したがつて、文学は、いかなる形であれ、驚き・感動・好奇心・悲哀という「心を動かす」ものでなければならぬ。「文学は文楽である」という意味の「楽しさ」はそういうことである。

また文学は文芸であり芸である。良いものを取り入れて「消化して昇華」し、作家として常に技能・内容を高めねばならない。本誌は文芸活動を通じて文化芸術の振興と、それが個々の人生の糧となるように努めるアクトス集団の機関誌である。ために相互の研鑽・理解を深め、よりよい創作活動と、豊かな生涯を形成する内容を目指す。

本誌の構成は、短詞型（詩・柳歌・短歌・俳句・川柳）・小説・随筆・児童文学・紀行・評論などのすべての文芸ジャンルを含む。多くの方の参加と、関係各位の協力を望む。参加同人の、苦しいが楽しい、コツコツと積み上げる個人的努力と、互いに刺激し成長し続ける「和」の、アクトス活動でありたい。

平成二十一年一月一日

アクトス会長・編集長

大西亥一郎



目次

知られざる戦争の傷跡バスツアー……伊藤雪山	1
夏の海Ⅱ「俳句」……夏子	7
父……小川悦子	9
お肌にシミが……大西亥一郎	11
眩き集………令月	18
偽りの歴史書二……早蕨 椿	20
薄紫……奮闘記その二……高阪博一	31
愛しき「モノ」達よ……柴小路秀磨	26
ー競演 かんー	
さざんかの咲くころ……永井組若芽	49
爛……大西隆史	51
カン暇な老人の話……高阪博一	55
感謝……大西裕子	63
編集室から	67

ドキュメント 2010.10.25

知られざる戦争の傷跡バスツアー

ー加西市鶉野飛行場滑走路跡とその周辺ー

伊藤 雪山

七十歳にもなり、これだけ歳を重ねてくると次第に感動や驚嘆することが少なくなる。大方のことは見聞きして、だいたいは想定
の範囲だったりするのだが、今回の見聞は私にとっては驚愕の体験
だった。

私は「知られざる戦争遺産バスツアー」に参加していた。それは
戦争遺産バスツアーというより「戦争傷跡見聞バスツアー」といつた
方が私にはピンとくる。

目指す目的の地は加西市の東南に位置する小高い丘陵に存在





した。

そこには、数多くの航空隊の遺跡が点在している。その中心となる姫路海軍航空隊^{うずらの}鷯野飛行場は、太平洋戦争が悪化しはじめた頃、優秀なパイロットを養成するため、昭和十七年に着工し、また、飛行場の西南には、川西航空機姫路製作所^{うずらの}鷯野工場があり、「紫電」「紫電改」など 500 機余りの戦闘機が組み立てられた。

ここは軍需工場である川西航空機も近傍にあつたため数度の米軍の攻撃を受けた。私達は対空機銃銃座、暗号班発電機本部庁舎跡、地下防空壕、素掘防空壕群、巨大大防空壕、弾薬庫、自動車部隊、衛兵詰め所等々の遺跡を訪ねた。

近くにこんなに多くの戦争の傷跡が点在している、これは一体どういうことなんだ。ここは沖縄ではない。視察していくなかで、これだ



けのものが、何故？という疑問が湧いてはそれは増幅した。そのことは後になつてわかつたことだし複雑で、難しい問題を含んでいて、今もひきずつているのだということを知つた。一部遺跡の破壊が試みられたが、あまりにも堅固な要塞として造られたため、壊すことかなわず、そのままの状態で放置されてきた経緯がある。現在、多くの部分は神戸大学農学部敷地となつていて簡単には立ち入ることができないが今回、特別の許可をもらつての案内となつた。

この中には姫路海軍航空隊の本部庁舎跡があつた。エプロン（前庭）があり、ここは神風特別攻撃隊の別れの儀式が行われた所謂、特攻隊別杯の場所である。今は、近くに牛舎が建つていた。

ボランティアガイドは遺跡を一つ一つ訪ね私達を案内した。戦争の傷跡を目前にして、息詰まる感情を込めながら、そして激しく吐露しながら丁寧な語りかけをした。私の中では過去の戦争はすでに



遠くのかなたに風化されつつあったのだが、その話は私の心を突き動かした。わけも分からぬ感情が熱くこみ上げ、興奮と一種緊張感の中に暗い過去を思い起こさずにはいられなかった。

今回、見聞のファイナーである鶉野^{うずらの}飛行場滑走路跡（冒頭写真）は不思議と当時のそのままの状態が残っていたのは驚きであったのである。これは全国でも珍しいらしい。長さ千二百メートル、幅六十メートル。私は滑走路跡の中央にしばらく佇み、そこでもガイドの話を繰り返し思い起こしながら遠く戦争へ出撃していった特攻隊員の姿を想像した。若く十五、十六歳で命を落とすことを命じられた気持ちを思った。滅私奉公、国のために潔く死ぬといえども、生死の狭間で悩みながら任務の達成に殉じた若者たちの群像はいかなるものであつただろう。私が今、その中にいたとすればと…。

た場所でもある。

実は、ここを訪ねる前に、小野市、瀧野市の境界付近の高台にある陸上自衛隊青野ヶ原駐屯地を訪ねて来ていた。そこには、今、正に国外からの侵入機を撃墜する地対空誘導弾ホーク、発射機、レ



平成になつてから、関係者の努力によつて慰霊施設が滑走路脇に建設された。平和祈念碑建立記念式典には全国から五百数十名の関係者が集まつたといわれる。その中には現在八十八歳の特攻隊として出撃しながら帰還した人もいたという。そこでの案内人の話は物悲しく心に響いた。そしてそのことを象徴するかのごとくしばらくして空は夕立雲に覆われ暗く転じて、雨粒となつて私達に降りかかった。私は、今、ドキュメンタリー戦争映画を見ているような錯覚におちいった。

ここは話題映画「火垂の墓」のロケ地となつ



ーダー、すばやく移動のための自動車牽引車等の近代兵器が静かに居座っていた。暗闇でも目標を追いかけ、霧の中でもほとんど命中率100%だと説明されている。

私は、今回のツアーを振り返り、視察したこの2つの対比は一体なんであろうかとしばらく自問自答し続けていた。そして、私はこのツアーをより広く多くの人に知ってもらいたいと思った。



俳句

夏子の恋シリーズ第V

8号 春うらら……君の温もりのつつき

夏の海Ⅱ……恋 終わる

夏子

沈黙はソーダ水の泡消えるまで

砂にかいた君のイニシャル波が消す

戻らない 君と過ごした夏の海

夏雲が消えるまで海を眺めてた

ただ海を見ていただけの恋 終わる

夏雲と昨日の私にさようなら

つづく



父

小川 悦子

お寺の本堂に静かに読経が流れた。泣き父の十三回忌の法要である。いつも心の中で生きてるので、こんなに月日が経つたとは思えない。

父は平成十年十二月に、七十二歳の生涯に幕を閉じた。五十台の若さで脳梗塞を患い、その再発が元で亡くなった。亡くなった時は、早い死と思ったが、父にすれば懸命に生きた七十二年の人生だった気がする。病気の後遺症で右足にマヒが残り、普通に歩けなくなっていた。その身体をおして数々の仕事を、父らしく懸命にこなしていた。何事にもまじめで、前向きな人だった。

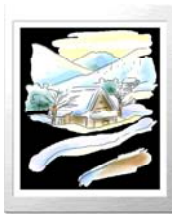
昔かたぎで、かたぶつで、口数の少なかった父、その父がとびつきりいい笑顔になるのが、孫と会ったときと、孫を遊びに連れて行くとき、それに孫たちに贈り物をするときだった。兄夫婦に子供がいなかったので、私の長女が初孫だった。生まれて間がない赤ん坊をこわごわ抱いていたのが、今だに心に残っている。

実家に帰ると、好物を買って待っていてくれたり、玩具を買うのを何より楽しみにしてくれていた。近くに住む姪や甥には、まるで着せ替え人形のように洋服を買っていたそうだ。そんな父を見て母は、苦笑していた。仕事一途で、子育てには関わりの少なかつた人が、孫には違う一面を見せていたようだ。それだけ孫は可愛い。今になるとその気持ちがよくわかる。私も同じようなことをして楽しんでいるから。

今生きてたら、「孫って可愛いよね」なんて話をして、気持ちをかち合えるのに。それに何も言わずに逝ってしまったが、成長をずっと見守っていたかつたことだろう。そう思うと悲しい。

天国の父に伝えよう。

「可愛がつてくれていた4人の孫たちも大人になり、それぞれ自立しています。折にふれ思い出して話をしていますよ。お母さんも年をとりましたが、元気です。皆で大事にしていますから、安心していてください」



お肌にシミが

大西亥一郎

山本浩三は、じつと鏡をのぞき込んだ。

改めて、いい顔だと思う。

細い眼、垂れた眉、団子つ鼻、分厚い唇。それが割合均等にやや縦長の四角い輪郭に収まっている。髪の毛は細くなり薄くなり量も少なくなつたが、まあ64歳にしてはしつかりしている方だ。もつとも黒く染めているからそう見えるのかも知れない。

（いい男だ）と内心呟く。若い頃は醜男だと諦めていたが、50歳を過ぎた辺りから、鼻の両脇に法令線が出来てきて、額に少ししわが寄り出すと、やや肌黒の顔が渋みを帯びてきた。

「いい顔してますねえ」

と飲み屋で会つた青年に言われたことも作用している。

「年月を感じさせて、落ち着きと、思慮、智慧が滲み出てますよ」

と言われたから、ビールを一本サーブスした。

確かにそう言われてみると、全体として個性的で渋いと自分で思う。

若さはないが渋さがある。

今までは自虐的に「おれはイケメンだ。但し、イケナイ、メンだがな」と言っていたのだが、渋さに

自信を持ち始めると、なんだか街行く女性が自分のことを見ているような気がしてくる。

「いや確かにそうだ。威圧的ではなくて、落ち着いた知性的なロマンスグレーと言われる男性のようないやな雰囲気を感じて自分でも感じる。」

髪も染めるのをやめてロマンスグレーにしようかとも思う。

山本浩三はニヤリとして、改めて鏡をのぞき込んだ。もう十五分近く洗面所でそうしているから、リビングの妻は「いつまで顔を洗っているのか」と思っているに違いない。

(そろそろ、戻るか)

と白い歯を見せつつ、あごを撫でて左の横顔を改めて見た。

「ん?」

と思わず小さな声が出た。

シミが大きくなっている気がする。

もともと薄い灰色のシミが左のあご上、頬の下辺りに二つあったのだが、その色が濃くなつて、大きくなつた感じだ。

(まずいな)

右を見てみる。目尻の横に老人斑があつたのだが、こちらも色が濃くなつた気がしないでもないし、右頬の数個の小さいシミも同様だ。

ため息をついて、洗面所の電灯を消して、階段横のリビングに戻った。

六十歳になる妻の友佳理が、浩三の顔を見てコーヒーカップにお湯を入れた。浩三は食卓の椅子に座ると、手を伸ばして薬入れのかごから、コレダケタ薬品のビタミンCの瓶を手に取り、蓋を開けた。

これはLシステイン入りとかで高いビタミン剤だ。お肌のシミに効くとある。飲んだ後にシミを見ると薄くなっている気がするから効果はあるのだろう。2錠口に含むと、出てきた熱いコーヒーを少しすすつて飲み下した。妻の皿の上に2錠載せておく。

「あら、Cなんて、風邪？」

と妻が聞く。

「いや、お肌のシミ」と答えると、妻はフンと鼻の先で答える。

息子と娘はそれぞれ独立しているから、三十五年間のつれあいと顔をつきあわしているわけだ。仲が悪いわけではない。妻は友達と旅行にカラオケ、陶芸教室と忙しい。浩三は、第二の勤めとして市の自転車置き場の整理員をしていたが、半年前で終わりになつた。その後は詩吟教室とスポーツクラブに週一、二回通っている。暇だが自宅では本を読んだりテレビを見たりと結構忙しい。まあ、こんな毎日で歳をとり時間が過ぎていくのだが、何かしたいという気持ちはある。だが、煩わしくて、だるくてしんどい。今更、人間関係でストレスはごめん被る。市役所勤務の三十六年間で十二分である。

それにしても身体は、心と違い正直に老化する。

浩三は蜂蜜を塗ったパンをかじり、腸まで届くというヨーグルトを食べながら新聞に目を通す。妻は連続テレビ紙芝居「どてっばん」を見ている。

食べ終えると薬入れから、白い大きなプラスチック製のボトルを3つ取り出す。コエンザイムと亜鉛とマカの錠剤を手のひらに載せて、ぽんと口の中にほりこんだ。亜鉛とマカは男性の性能力に効くと言うが、まあ気休めである。栄養剤だと思っている。

3つのボトルを元の位置に直すと、オレンジ色のボトルを取り出して、二つのタブレットを妻の皿の縁においた。

「ありがとう」

妻は目の端で捉えてまだパンを啜えている。この二個のタブレットはコラーゲンである。

（おれには必要ない）

と浩三は思う。

コラーゲンは、皮膚や骨などを構成するタンパク質のひとつで、体内に存在している総量は全タンパク質のほぼ三十パーセントを占める程多い。皮膚の張りを保つ、関節の痛みを改善すると言われているが、コラーゲンの経口摂取による有効性は科学的に十分に証明されていない。

（効かないぞ、ダメだとも言えないしなあ）

そう思いつつ、浩三は最後にビタミンB剤を一粒口に含んだ。疲れに効くらしい。自分の飲むものは効くと思っているのだから勝手なものだ。

食事をすまし新聞を読み終えると、浩三は椅子から立ち上がって、再び洗面所に戻る。これは身体に染みついた動きである。8020運動というのがあつて、それを実践しているのだ。八十歳で二十本、自分の歯を残そう、そのためには食後の歯磨きをと言うものだ。

（まあ、男の平均寿命が七十九歳だから、八十まで生きるかどうか判らんがなあ）

と思いつつも歯磨きは欠かさない。両親が八十すぎまで生きてゐるから、九十歳まで行くのと違ふかという淡い期待もある。その反面、「しんどい話だ」と思わぬ事もない。

六十歳の声を聴いてからは、何につけても「あと何年生きられるかなあ」というのが頭の隅にちよこんと居座つてゐる。

（まあ、大体だなあ、五十歳になると頭も薄くなり、足腰も弱り、目も悪くなり出す。女性は生殖能力を失うし、男性もそろそろしんどくなり出す。子どもは独立し始めている。つまり子育ては終わりである。人間は動物的に五十五歳から六十歳辺りで社会的にも生物的にも終わりなのだ）

と誰しも何度も思う考えが心の隅に蹲うすくまつてゐる。

その一方で、加山雄三や、吉永小百合を見ては、いやあ、まだまだ俺もそうありたいと願い、歩道の段差で躓つまずいては愕然とする。そしてその度に心の隅にいる奴の存在がどんどん大きくなる。

歯ブラシを口にして、浩三は再びしみじみと顔を見た。

長い間つきあつてきた顔だ。

身体の方は風呂に入る度にちらりと目にする。こちらは若い頃のように海水浴に出かけたりして外部の異性に晒すことがないので、余り意識していない。腹が出て、足が細くなつて、肩も腕も筋肉がない。尻も締まりがない。

スポーツジムでは、出来るだけ歩くようにしている。高齢者でもキン肉マンがいるが、しわが寄つたような筋肉である。ないよりはいいかも知れないが、無理に鍛えたいとは思わない。時折、若い女性がトレーニングマシンなどにいると意識して緊張するが、向こうは浩三の存在など眼中にないことはよく判っている。

顔は洪みがあつても、トレーニングパンツスタイルでは、顔だけ浮き上がつて不気味なのだ。

鏡には洪さより老残の顔が写っている。

頭は薄い、目は白内障の初期だという。耳はテレビの音を大きくするようになった。眉毛と鼻毛と耳の中の毛はほっておくとどんだんのびる。新陳代謝が衰えているので、新しいものに生え替わらないのだ。皮膚は張りがなくて、艶もない。まあ全体として洪みという表現が出来なくもないが、法令線は深く刻まれ、耳朶の下にはしわが寄り、額のしわも深い。

歯ブラシから見える歯も、白さを失い、艶を失い、薄くなつて迫力に欠ける。

(老醜だな……)

浩三は大きくため息をついた。

それから再び鏡を見つめた。

しかし、努力を捨てたらすぐに老いる、と思う。アンチエイジングの時代である。もつとも老いは逆らえない。なだめるだけだ。

（それでも若くありつつ老いるぞ、フレキシブルエイジで行くぞ）

浩三はため息の塊を勢いよく吐き捨てると、歯ブラシを洗い、口をゆすいで、足音を立ててリビングに戻った。

妻の友佳理は、お茶を飲んでいる。テレビの画面から顔を上げて、怪訝そうに浩三の顔を見た。「どうしたの？」

「おい」浩三は言葉を一度切った。そしてオレンジ色のボトルを指さした。

「俺もそれ飲むぞ」言葉に勢いがある。

「なに」

「その、エンヤコラーゲン！」

おしまい



呟き集

〈子どもの呟き〉

冬の園庭で遊んでいた冬樹^{ふゆき}。教師のところへ走ってきて

「先生、手が冷たくなつた」

「どれ？ わつ本当だ！ 冷たくなつちやつたね」

「風と手つないだら冷たくなつてん」

音楽会終了後の五歳児に「みんな頑張つたね」と声をかけると

「つき組も頑張つたけど、先生も頑張つてたやん」

「ん？ 先生も頑張つてた？」

「うん！ 先生、ことり組のピアノ頑張つてたやん」

部屋でお絵かきを楽しんでいた綾香^{あやか}が、飛行機の音を聞いて飛び出した。その後を追って外に出ると、綾香が飛行機雲を指差して言つた。

「見て見て、飛行機もお空に絵描いてるで！」

「ほんとだね」

「お空の先生に見せるねんな」

園内のクリスマス会で歌う「あわてんぼうのサンタクロース」を歌い終わつた後、梓^{あずさ}が手をパチンと叩いて

「そうや！このお歌サンタさんに聞かせてあげたらいいねん。サンタさん喜ぶで」

「ほんまや！僕もサンタさんに歌つてあげる」

〈大人の呟き〉

「大野、お芋さん食べる？」

「なんで芋に“お”と“さん”つけて、俺は呼び捨てやねん！」

〈妹の呟き〉

「犯罪に手を染めるつていうやん」

「うん」

「でもつて“犯罪から足を洗う”つて言うやろ」

「うん、それで？」

「手、犯罪に染まつたままやんな、どうするん」

「…」

※文中の名前、クラス名は架空の物です。

偽りの歴史書 二

早蕨 椿

自分が生まれた季節は春だった。暖かい日差しと満開の花、世の中の全てが自分を祝福しているかのようで嬉しかった。けれど、そんな祝福よりも嬉しかったのは何よりも愛しい母に会えることだった。生まれたばかりでまだ目は上手く開けられなかったが、必死に手を伸ばして母の姿を求めた。それは本能と言っても過言ではない。伸ばした自分の手に触れた母の手の温もり、抱き上げられ、母の胸に抱かれた心地良さは今でも覚えている。春の日差しよりも風よりも温かかった母の手。その手が触れた瞬間に、新しい世界へ出た驚きと不安で泣いていたことなど忘れてしまった。母の温もりに心地よく抱かれてみると、母はいきなり自分を力強く抱きしめると走り出した。

母がどこへ向かっているかは知らない。けれど不安は微塵も感じなかった。母と一緒にならどこでもいいと思った。そのときは、そんな些細な夢が崩れるなんて思ってもいなかった。

どれくらい走ったのだろうか。まだ目が上手く開けられず、周りの状況がわからなかった。周りは静かで何の音

もしない。自分が生まれた場所からどれほど動いたのだろうか。そんなことを思っていると、突然母の手が離れて自分の体は大地に下ろされた。母の手の温もりや柔らかさが離れ、背中から伝わってくるのは土と草の匂いだけで、何もわけが分からなくて、不安で怖くて、母の顔を見て安心したくて……必死に目を開けた。しかし、やつと思いで開いた目が見たのは、自分に背を向けて走り去る母の姿だった。

行かないでと叫んだ。けれど、言葉にならず「おぎやあ」という音しか出なかった。それでも自分は何度も何度も叫んだ。

いかないで

こわいよ さびしいよ

おかあさん

おいていかないで

ひとりはいやだよ

必死に叫んだが母は一度も振り返らなかつた。悲しくて涙が溢れて止まらなかつた。

どれだけ泣いたのだろうか。自分の叫びを聞いて母が戻ってくるかと思つたが、もう泣く元気もなくなつてきていた。早く母が戻ってくることを願っていると、足音が聞こえてきた。母が来てくれたのかと思ひ、自分は最後の力を振り絞つて泣いた。「おかえりなさい」そう伝えたが、聴こえてきた声は母の声ではなく、男性の声だった。

「捨て子……高天原でいたい誰が」

そう言つて男性は自分をそつと抱き上げた。母のような柔らかい感触ではなく、がつしりとした腕に抱かれた。母ではなかった悲しさと、見知らぬ人に抱かれた不安からまた涙が溢れてきた。もう泣く力などないと思つていたのに、わけの分らない不安から逃れたくて必死に母を呼んだ。

おかあさん

おかあさん たすけて

ねえ このひとはだれ

おかあさん

必死に叫んだが母は来なかった。悲しくて涙が溢れて止まらなかった。自分を抱く存在があやしながら声をかけてくる。

「どうした？ 腹が減つたか？ 誰ぞから乳をもらつてやろうな」

違う違う違う



確かに腹は減っていた。乳も飲みたかった。飢えていた……でも、本当に飢えていたのは心なんだ。腹が減っていてもいい、眠れなくてもいい、暑くても寒くてもいいんだ。母がいてくれるだけで良かった。なのに母は自分を捨てた。

*
*
*
*
*

生まれてからほんの少しで母は俺を捨てた。躊躇いも悲しみもなく、物を捨てるかのように……。

生まれて初めて見た景色は、俺に背を向ける母だった。

生まれて初めて発した言葉は、母を呼び止めるものだった。

俺は全てを母に委ねていたのに、母は俺を捨てた。何も与えず、何の言葉もかけずに捨てた。

名前なんてない。母は名前すら付けなかった。

母にとつて俺はいつたい何だったのだろうか。生まれてすぐに捨てられた。俺はどうして存在しているのだろうか。

誰かも分からぬものに心の中で問いかけてみる。「どうして」と何度か何度も問いかける。いくら問いかけようとも、決して良い答えなどないと知りつつも、続けるように問い続ける。要らない存在ならば、いつそ何も分からぬ時に……辛い真実に自分で気づく前に消してしまつてほしかった。何故生かしたのか、要らぬ存在ならば見つかる場所に捨てず、川や谷に捨ててしまえば良かったのに……。

母であるあの女が俺を捨て、捨てられた俺が拾われた後、俺には名前が与えられた。”九郎”というのが俺の名前らしい。別に俺にとつては名前などどうでもいい。名前など誰かを特定するための固有名詞にしかすぎず、俺に

とつてのその固有名詞がたまたま“九郎”となっただけだ。この名前に愛着も何も持つてはいない。本当は、他の誰でもないあの人に名前を付けてほしかった。どんな名前でもいい。あの人がつけて、あの人が呼べば、それは俺にとつて掛け替えのないものになるはずだったのに……。屋敷から離れた竹藪の中を歩き、空をうつすらと染め始めた陽を見ながら捨てきれない過去の思いに捕らわれる。

女々しいと我ながら思うが、俺はこうする以外に自分がこの世界で生きているという事実から目を背ける方法を知らない。

ああ今日もまた陽が上る。どれほど自分が嫌がつても陽は無情に上り強制的に一日を始めさせる。

* * * * *

俺がこの高天原に連れてこられて何年が経ったのだろうか……。相変わらず俺は与えられた庵から出ることを許されず、監禁状態にある。庵の中には文机と布団、衝立くらいしかなく暇を潰す物が何もない。庵の周囲には何かわけの分からない仕掛けでもされているのか、俺が一步外に踏み出そうとすると周囲に静電気みたいな物が走る。無理に外に出てもいいんだが、恐らく俺をここから出さないために仕掛けられたものだろうから、本気で出ようとするとは何が起こるかわからない。

そんなことを考えながら、今日も変わりなく一日の始まりを告げる朝日を縁側から見上げる。すると、庵の横手にある竹藪の方から足音と葉の擦れる音がする。庵の周囲は竹藪に囲まれているが、一ヶ所だけ道がある。建

御雷之男神や経津主命だとするとその方向から来る。わざわざ道のない竹藪の中を歩いてくる利点はない。

この存在を知らない奴が迷い込んだか、それとも噂程度に聞いた此処の存在を探りに来たのか……どちらにしろ、この世界にいる奴らは俺の事を快く思わない奴ばかりだ。俺の存在を知って興味本位で見に来たのか、それとも忌み子を殺しに来たのか……どちらにしろ警戒しておかなければならないと感じ、俺は下ろしていた腰を僅かに浮かした。

揺れる竹藪に厳しい視線を向けていると黒い髪の毛がちらちらと見えた。見える高さから考えると大人ではない。子ども……それも小学生くらいの子かもしれない。そんな考えを巡らしているうちに竹藪の中から幼い顔が出て、こちらを見た。小さい男の子だ。向こうはこんな処に庵があるのを知らなかったのか少し驚いた顔をしていたが、俺の存在を知ると目つきを厳しくした。

「貴方は誰」

落ち着いた声だが、警戒心が含まれていた。見た目五、六歳くらいの子どもが出す声ではない。ただ、今まで自分が見てきた高天原の奴らとは違う感じがした。

「……忌み子だよ。知っているだろう」

「忌み子？」

俺の言った言葉の意味を分からないとでも言うように、子どもは首をかしげながら聞き返してきた。その態度が何も知らない、安穩と生きている奴の姿そのもので俺はイラッとした。

「知らないのか。禁じられた子、忌むべき存在。在ってはならない神と人との混血児だ……神が見下し、人が知らな

い闇に葬られる存在」

「……………」

「神なんて高潔な存在じゃない。神は人を救うと言うが、なら何故俺はここに監禁されている？ 神は人を最後まで見捨てないと言うが、俺の存在を捨てているようなもんだろう？ 神が慈悲を下さるというなら……どうして俺の母親を見殺しにして、父親を殺した？ 神など自分たちより劣る人間を見て自分の優位を確認したいだけの傲慢な存在だ！」

気がつけば俺は自分の心の中にある思いをぶつけていた。こんな小さな子どもに言つたって意味がないのは分かっている。でも、言わなければ気が済まなかつた。どうして俺がこんな扱いを受ける。母さんが人間で、親父が神だつた……それだけだ。親父は確かにこの高天原での罪人かもしれない。でも俺は何もしてない。何も知らずに生まれて、何も知らずに育つた。それだけなのに、ここでの俺は忌み子と呼ばれ、監禁され……何なんだよ！

考えれば考えるほど怒りが心の奥底から湧いてくる。言いようのない不快感が溢れだす。俺と子どもを仕切る見えない壁を睨むと、その壁の向こうで子どもは下を向きながら呟いた。

「貴方は……俺と同じなんですね」

「え？」

「俺と同じだ。見放されて捨てられた……要らない存在」

子どもは下を向いたまま淡々と独り言のように呟く。着物を握り締め、小さく肩を震わせている。思う言葉がうまく出てこないのか、着物を握る手に力が籠り皺がきつくなつていつている。よく見れば着物に幾つか涙の跡が見

て取れた。

「そうだよ…神なんていない。神なんて架空の存在だ、自分達が神と言うことに陶醉しているだけの愚か者の集まりだ」

「……………」

子どもはゆつくりと顔を上げて俺を見た。その目には、とても子どもとは思えないほど暗く、深い闇が存在していた。

「貴方が混血児で忌み子と呼ばれるなら、俺は捨てられた忌み子です」

「…お前、名前は」

「九郎」

九郎と名乗った子どもは表情を変えずに話した。その姿が余計に子どもらしくなくて、今までの言葉から九郎が俺と同じで高天原を嫌っていることが窺えた。そう感じた瞬間に親近感が湧きあがつた。こいつは俺と同じだ…生まれた場所や立場は違うが、同じ境遇の存在。共に要らないと捨てられ、見捨てられた存在。出会うべくして出会った存在なんだと、そう感じると無意識に手を伸ばしていた。

「俺の名前は海生。なあ九郎、一緒に……………いかないか」

九郎は俺の手が伸ばされたのを知ると、深い闇を湛えた瞳を少し和らげながらゆつくりと手を伸ばしてきた。不思議と、九郎の手は境界線を越えても静電気もなにも発生しなかった。互いに触れた手は緊張で少し冷たかった。それでも手を通して互いの気持ち伝わったのか、視線が合うと九郎は僅かに微笑んだ。ああこいつも俺も

求めていたんだ。この異質な世界で分かりあえる同胞を求めていた。そして見つけた。

九郎と出会ってから俺の毎日は変わった。いつも会いに来るのは建御雷之男神や経津主命だけだったが、その二人が居なくなつた時を見計らつて九郎が会いに来るようになった。俺の周囲に張られている術みたいなものは俺にだけ反応するようで、高天原の奴らが通つても静電気のようなものは発生しない。本当に俺を閉じ込めておくだけのものだ。しかし、俺がこの術に触れなければ、この庵への出入りは特に監視されている様子はなかった。そのお陰で九郎の出入りが他の奴らに邪魔されることはなかった。

九郎は不思議な子どもだつた。いや、神の子どもというのは皆こんなものなんだろうか。外見に似合わない大人びた思考、態度、それがもの凄い違和感を覚えさせる。子どもらしさが全くない。それが神の子ども故なのか、九郎の持つ捨てられた過去故なのかは分からない。ただ俺達は互いにこの高天原という世界での異端分子だつた。九郎が来て俺の毎日は変わった。出会つた当初はお互いにまだ多少の警戒は残っていたが、毎日会つて話をするうちに打ち解けた。互いに持っていたのは高天原への不信、疑惑だつた。神という存在の不信、疑惑から始まり、自分達の身の上に対する怒りと恨み。そういったことを日々話した。九郎はとても聡い子どもで俺が考える以上に色々なことを考えていた。そんな九郎との日々は誰とも話せず、一人閉じ込められて自分を見失いかけていた俺にとつて、救いだった。

ある日、九郎が来なかった。いつもは陽が天頂に差しかかる前には来るのに、今日に限つては陽が傾きかけても

来る気配はなかった。体調でも崩したのだろうかと思つたがこの庵を出ることが出来ない俺には確かめる術もない。

とうとう陽が落ちてしまい、今日は来ないだろうと諦めかけた頃に竹藪が揺れた。九郎が来たのかと思つて腰を浮かせたが、現れたのは経津主命だつた。手には食事を持つていたのでもうそんな時間かと思ひ、自分がかなりの時間待つていたのだと知つた。経津主命は俺の顔を見て減多に見せない笑みを浮かべて言つた。

「ずっと待つていたのか？ 残念ながら九郎は来ないぞ。今日も明日も明後日も…来ない。否、来られないな」

その言葉に俺は経津主命の方を勢いよく向いた。その行為が拙かつたと気づいたのは次の台詞を聞いた時だつた。「その様子だとやっぱり九郎と会つていたんだな。この庵が全く監視されていなくても思つていたのか？ 庵の周囲に張つてゐる術だけだと思ひ、周囲の気配は氣に留めていなかったということか」

経津主命が周囲の竹藪を見まわしながら言つた。確かにその通りだ。術が仕掛けてあるからそれだけで安心なんて普通はできない。きつと毎日でなくとも何日かに一度くらいの割合で監視が来ていたのかもしれない。その事に氣付けなかつた自分を叱咤する。そして経津主命が言つた「九郎が来ない」理由を考えてみるが思いつかない。一体なんだろうと考えてみる。俺の考えを見透かしたように立て続けに声が掛けられる。

「九郎は高天原を追放された」

——— 追放

その言葉の意味を理解できなかった。追放なんてどうして。何故、九郎が追放されなければならなかつた…。

「意味が分からないという顔だな。九郎の追放理由はお前との接触だ」

「……なに？」

「忌み子であるお前との接触は掟により禁じられている。その行為を一度ならず二度三度と行つた。その行為は子どもであれ許されるべきものじゃない…故に然るべき処分として高天原追放とされた」

「何故、そんな情報を俺に？」

経津主命は聞いてもいないのに九郎の事を俺に話す。その情報にどれだけの信憑性があるのかは分からないが、今のおれにはその話を信じるしかない。だが、危険視されているであろう俺に何故それらの情報を与えるのかが分からなかった。この情報を俺に与えて何を企んでいるのか…。

「自惚れるな。忘れるんじゃないぞ、九郎の追放の原因が自分だということを…」

そう言つて経津主命は食事を置いて去つて行つた。遠ざかる足音が何故かいつも以上に空気を震わせているように感じた。

九郎が追放…高天原を？一人で？あんなに小さな子どもを追放して生きていけるはずがない。いや、誰かが傍についているかもしれないが、それでも子どもを追放するなんて正気の沙汰じゃない。昨日は普通に來て歸つて行つた…ならば昨日の夜から今朝にかけて身柄を拘束、追放されたことになる。経津主命は二度三度と言つていたから、恐らくそれだけの回数、俺と九郎が会っているのを目撃しているはずだ。なのに何故この時期になつて…いや、時期なんかは関係ない。あいつらは九郎と俺が接触しているのを知っていながらそれを野放しにしていた。恐らく、九郎を通して俺の心中を探るつもりだったが、あいつらは九郎が俺寄りになつていると感じた。だから九郎と俺を離そうとした。同じ高天原においては絶対に会わないとは言ひ切れない…この高天原で監禁されている俺と確実

に離すなら地上に行かせるのが正解だ。名目上は俺との接触を咎めたものだが、その実、九郎がこれ以上俺と親しくなつて高天原の内容を漏らさないようにだ。

だからと言つてあんな小さい子どもを……。俺の中に罪悪感が湧きあがる。九郎……。暗く、絶望を瞳に宿した子ども。子どもらしくない子どもだと思つていたが、少しずつ心を開いてくれたのに……。その矢先にこんな仕打ちを受けるなんて！

「絶対に許さねえ……。経津主命も神も全て！何が神だ！何が掟だ！いつか潰してやる……。何もかも俺が潰してやる！」

経津主命が去つて行つた方を睨みつけながら、俺は自分自身に誓つた。

薄紫：奮闘記その二

高阪博一

電車が停まつた。降りて、北の方に眼をやつた。白壁と櫓が見える。光を反射して、一層白く見える。プラットホームを風が吹き抜けていく。木々の枝がゆくり揺れている。暖かいといつても、師走も既に半ば、風は冷たいのだ。改札を出て、南の方に歩き出した。今日は海を見るつもりで、いつもより早く家を出た。冬の殺風景な海を見

ようなんて、物好きなど思いながら。月に一度、第二土曜日に必ず明石に行く。同人誌の例会なのだが、午後三時に始まる。毎回、午後二時四十分過ぎに改札を通るのだが、今日は午後一時三十分、一時間ほど早い。

明石には三十年ほど前に引越し、それから十年ほど住んだことがある。当時からJRは高架であったが、海側の山電はそうではなかった。通勤時、上がらない踏切にイライラしたことを覚えていいる。その二つの鉄道が隣り合わせの高架になってしまっている。知らぬ間に、時間は黙って静かに、そして確実に過ぎて行つて、その後に変化という厄介なものを置いていく。

国道二号線を渡り、『魚の棚』の東の端を真直ぐ海の方に歩く。『錦江橋』を渡る。橋の幅が広くなっている。この橋から見る夕日が殊に好きだった。船留りの入江の夕暮れ、オレンジがかつた赤い色が、橋の方に向つて光の太い線を延ばし、水面を染めてキラキラ揺れているのを幾度か見たことがある。だが、この季節になると、水面の明るい光もどこか寒々しい。

それにしても、『タコフェリー』が休止になるなんて思いもしなかった。東に見えるあの大きな橋は嘗てなかったのだ。出来たものによつて、今まであつたものがなくなつてしまふ。効率とか、進歩とかいうことを考えれば、仕方の無いことかもしれないが寂しい限りだ。ひよつとして、あの橋もなくなることがあるかもしれない。私の頭では想像できないが、時間という途轍もない機械はあの橋をも消去つてしまふかもしれないのだ。

フェリー乗り場から、以前住んでいたマンションの方へ防波堤沿いを歩いてた。淡路島が真正面に見える。この海峡のこの辺りが最も狭いのだろう。海をひよいと渡れるように島が近くに見える。その昔、この海峡を泳いで渡つた人が幾人もいたそうだ。多くの船が行き交うこの海峡を泳いで渡るなんて、危なくて事故のもとだと思うのだ。

が、そんなことをしたい人は数多くいる。向こう見ずな人はいつの世にもいるものだ。源氏を読もうとすることもあ
る意味で同様かもしれない。

明るい昼下がりの陽が灰色に黒味を帯びたコンクリートを照らしている。海沿いは駅より風が強い。夏は海の
微風で気持ちよいのだが、冬は海の嵐でこの上なく寒い。私はパークカのジツパーを首まで上げて、辺りを見回した。
自動販売機が眼に入った。暖かい缶コーヒーを買って、防波堤に坐つて海を見ていた。コンクリートの冷たさがじん
わりと下半身を覆いだした。背後の道の方で若い女性の声が出た。それは聞き覚えのある声であつた。

「寒いけど、飲むんやつたら、コーラでしょ。フツフツ。その後、どこまで進みました、例のゲ・ン・ジ」と一寸低い
声が出た。振り返つた。短い髪に小さな顔、落着いた黄色いハイネックのセーターに、黒いデニム地のストレーツボ
ンを穿いたすらつとした女性。派手だけの感じから、どこか大人びた装いに変わつてはいても、間違ようはない。立っ
ているのは薄紫さんだつた。

「そろそろ、かなあ?」と思つてましたよ。もう、半年ですものね。あれから、帰つて、先生に報告したら、『下手な和
歌作つて。十年早い』つて、真つ先に怒られました」と笑いながら彼女が言葉が続けた。「私が余分なことをしたた
めに、怒られて:」と謝ると、「そんなに気にしなくても。先生は言うたら終わりの人やから、後に残れへん。気に
しない、気にしない」と穏やかな調子で彼女が答えた。

ふと、薄紫さんの背後に、ジョギングしてくる初老の人が見えた。「え! 当る」と声が出そうになつたのだが、その
初老の人は何事も無かつたように通り過ぎて行つた。「どうして?」と不審に思っていると、「他の人に私は見えま
せん。私の声も聞こえません。ただ、あなたにだけ反応する、あなた専用の『ゴースト』みたいなものなんです」と薄

紫さんのはつきりした声が聞こえた。

「例の映画、見はりました？あの映画では、霊媒師にだけ見えたり、聞こえたりしましたよね。あれと、同じです」と言いながら、「あの映画良かったですね。サントラが映画にピッタリしていて。それに、あの女優さんも……」と私の方をじーと見ている。恋人に背後から抱かれて、陶器造りをしている場面が頭をよぎった。前の夢でも思っていたのだが、あの黒髪でショートヘアの女優さん、薄紫さんに似ているのだ。それに、低い多少ハスキーな声も。

「また、どうでも良いこと、喋ってしまつて……。横に行つても良いですか」と彼女は言いながら、ひよいと防波堤をまたいで私の傍らに坐つた。足を投げ出したのでじろじろ見ていると、「足はちゃんとありますよ。普通のひと一緒ですよ。ただ、中身がないだけです。手を握ってくださいませんか？」と言うので、多少どきつとして手を握ると、まったく膨らみや柔らかさがなくて、一人でこぶしを作っているような感じであつた。

「こんなことをしていると、また、話がそれる」と一寸慌てたような声を彼女が出した。「二ヶ月ほど前、紫先生が過労でダウンされたんです。先生から『よう、見といたりや。あら、まだまだ、掛かるよつて。それにしても一年間、投げ出さんと読んだもんや。可哀相やから、年末までのキャンペーン期間は無期限延長や』と言われて、交代して、パソコンから様子を見ました』と言うので、「それは有難うございます。ところで、紫先生は大丈夫ですか」とお礼と共に、先生の安否を問うた。「大丈夫ですけど、まだ静養中です。なにせ、ご高齢。千歳以上ですものね。時間ばかりますよね」と彼女が応じたので、「一度亡くなった人だ。二度と亡くなることはあるまい」と内心で妙に合点して、この前のように質問をすることにした。先ず、現状から話し出した。

「いま、八帖『花宴(ハナノエン)』の半分程度です。今年中には、この帖を読み終えるつもりなんです……」と力な

く小さな声を出した。「あの時が、五帖『若紫』の半分程度だったから、『末摘花』と『紅葉賀(モミジノガ)』は読んだのですね。二ヶ月に一帖ペース、一年で六帖つてところですね。残り四十六帖だから、すると、読み終わるのにはば八年。来年が平成二十三年だから、三十年中には読み終えることになるわけか。幾つになるのかな？」と標準語の事務的な声が聞こえた。「七十歳を超えてしましますね」と答えると、「平均寿命内やから、オーケーやわ。身体も丈夫そうやし、禁煙も始めたようやし」と今度は悪戯っぽく笑いながら薄紫さんが言うのだった。

そう言われると、禁煙を始めて二ヶ月が既に経過している。今度の値上げ幅は大きなもので、年金生活者には厳しいものであった。健康と家計を考えてのことだが、多少(?)困ったことがある。源氏を読んでいた解らぬところが出てくると、以前は煙草を吸ったものだ。それですぐに解るわけもないのだが、イライラは解消していた。今はその手が使えない。そんな時は冷蔵庫を開けて、冷たい水を飲むことにしている。これでは身体が冷えて、今年は風邪を引きまくるかもしれない。すると、医療費が増える。結局、家計の足しにはならないかも知れない。

「あの参考書、読みました？」と言うので、「小西先生の『古文の読解』ね。いえ、読んでいません。すいません」と言つてぺこりと頭を下げた。「別に、私に謝る必要はありません。源氏を読み終わるのが、どんどんずれるだけですから。私は痛くも、痒くもありません」とまた事務的な言い方に変わってしまった。そして、ふーと彼女が溜息をついた。「あの、読み方では時間……ないでしょうね。辞書引きすぎ。だけど、十帖までは、そう読むしかないって、前に言ったから、仕方ないでしょうね」と何度言つても分からない落第生を、それでも見捨てられない先生のように、薄紫さんの口調に優しさが戻った。

「パソコンから見ていると、同じ語句を辞書で何回も引いている。この時間の無駄が最大の原因」とまた容赦ない

言葉が飛んできた。彼女は私の年齢を知らないのだろうか。六十を超えている者に、記憶力を云々するのは酷というものだ。高校生や大学生の柔軟さはもう望むべくもないのだ。恨めしげに彼女を見てみると、「恨めしいのは『ゴースト』の専売特許です。だけど、私は恨めしくて出てきているわけではありません。あなたを助けるために出てきているのです。この世智辛い世の中で、全くのボランティアなんです。それをお忘れなく」と顔は笑っているのだが、言葉は厳しい。それに、こちらの心の内を見透かしている。「さすが、『ゴースト』と言葉が飛び出しそうになったが、それを飲み込んでしまった。」あなたを高校生に戻せばいいんでしょうけど、そんなこと、できへんし。時間が掛かるのは、これも仕方ないでしょうね。他に、何か質問は？」と薄紫さんは話題を変えてくれた。

この半年間、私なりに努力はしてきた。何十年ぶりで図書館へも行つたのだ。あの静かな他人行儀さとか、横の者を無視するというのか、図書館独特の雰囲気が大嫌いだったこの私が、である。源氏物語の訳本は見ないと決めていたのだが、和歌の読解は手に負えず、仕方なく行つたのだった。

これが当つた。そのものズバリの本があつた。いや、私を待っていたと言つたほうが良いかもしれない。題名は『歌で読む源氏物語・第一巻』。この本は和歌の解釈・その文法の説明と共に、詠まれた場面説明もされており、物語の筋立てが分かるように工夫されている。言うことは『アンチヨコ』と言えなくもない。先に読んでしまわないかと、多少気懸りではあるのだが……。そこで、和歌の話をしようと思った。

先ほど「紫先生に怒られた」と言っていた。和歌は作らないとしても、何か参考になりことがあるかも知れない。「源氏物語に和歌つて、何首あるか、知ってます？」と失礼な質問を試してみた。「和歌ね。数えたことないな。相当あると思うけどなあ。五十四帖で、一帖五首強として、三百程度でしょうか、何て答えると思つているでしょ。違い

ます?」と悪戯つばく笑いながら私の顔を覗き込んでくる。「そんなこと、決して、思っていないですよ」と言おうとすると、すぐさま「七百九十五首です」とびしやりと低い声が返ってきた。

「一帖、十五首平均やから、相当出てくる感じがするわね。地の文が多少分からなくても、和歌が理解できれば、大意が分かると思うのは当然かも……。でも、その逆も、ありなんやけどね」と言いながら、「前回もそれ言うたでしょ。古今和歌集を読めつて。これも読んでへんー!や、ね。まあ、それでも、探してきただけ良しとしましょ。それに、あの本は良いと思いますよ。パソコンから見ているとね」と薄紫さんは一気に喋り終えた。どうも、この本は彼女の眼鏡に適っているようだ。まだまだ長い付き合いになりそうなので、彼女を怒らせたくはない。

「そうしたら、その本を平行して読んでいってください。くれぐれも言っておきますが、先にこの本を読まぬこと。自分で原文を読んで、自分なりに解釈し、それが合っているかを本で採点する。そんな読み方ですよ」と子供に諭すように薄紫さんが言うのだった。私の気懸りを充分に分かった上で、注意してくれている。黙って頷いていると、彼女は満足したように首をゆつくりと上下に動かしながら、右の親指と中指を弾いてパチンと音を出した。前回の夢の中では気付かなかつたが、それなりに納得した時、指を鳴らすのがどうも彼女の癖かもしれないと何となく思った。

「光るの君もこの海を見ていたのでしょうか?十二帖の『須磨』と次の『明石』。この地方が舞台になっていますよね。権力闘争で危なくなつて、この地に逃れて、ほとぼりを冷ますのです。ここでまた浮名を流すことにもなるのですが」と彼女が話題を変えてきた。「そうですね。来年の夏ごろには読んでいるかも……」と力なく言うのと、「だいたい、この『須磨』あたりで、挫折する人が多いそうですね。先生も『何でやろう』とよく言つてらっしゃいました」とクス

つと笑いながら私の顔を覗き込んでくる。「私は大丈夫です。薄紫さんが付いてるもの」と彼女の顔をやや俯き加減に眺めて言い返した。

「私が読むではありません。あなたが読むのです。私が付いていても、あなたにその気がなければ、どうすることも出来ません。いつも、返事だけは一流なのですが、実行は三流も良いところです。こんな人と関わりになるなんて、私つて不幸です。それに、こんなに話していても、飲物一つ出てこないなんて！私つてやっぱり不幸です」と一気に喋り終え、泣く真似をしながら、私を見て大きな声で笑い出した。薄紫さんつて、本当にお茶目な人なのだ。「ごめんなさい。飲物、買ってきます。もちろん、コーラですよ」と言うと、こくりと頷いて、またパチンと指を鳴らした。

この寒いのにコーラなのだ。それを買ってきて、彼女に差し出した。この前も不思議に思つたのだが、何故、彼女はコーラが好きなのだろうか。何か深いわけがあるに違いない。コンクリートに坐つてみると、じわーと寒さが伝わってくる。風も徐々に冷たくなってくる。それなのに、あの拘りようはきつと何かある。

「この前もコーラ、こんな場所でもコーラ。どうしてなんですか？」とストレートに聞いてみた。「例え『ゴースト』でも、寒いものは、寒いですよ。歩きながら話しましょ」と言いながら彼女は立ち上がった。横に並んで私も歩き出した。ちらつと時計を見ると、午後二時半頃になつていた。

「先生のお供でアメリカに行つたことがあるんです、五年程前に。『ゴースト』文学会という組織があるんですが、その世界大会がアメリカで開催されることになったんです。そこで、『王朝文学に於ける女性の自我とその確立について』という題で講演の依頼が先生のところに来たんです。そのころのアメリカは景気が良くて、環境や暮らしな

んかも含め、いろんな大会をどんどん主催していました。サンフランシスコに在る大学に泊つて、二週間の予定でした」と彼女が何となく淋しそうな表情で、ぼちぼち話し出した。

『ゴースト』の世界にも景気の良し悪しがあるようだ。そう言えば、リーマン・ショック以前の何年間は好景気であつたろう。実体の無いバブルに人間達は酔つていたのだ。『ゴースト』達はそんなものに酔うことはなかつたのだ。将来に意味のあること、残さねばならぬことをしていたのだ。人間と比べ、『ゴースト』は偉い。

「偶々、その時十二人の先輩方は忙しくて、私がお世話係兼素人対応係で付いて行くことになつたんです。『どこにも、ミハーは居るよつて。私、歳やから、そんなんと、よう付き合わんわ』と先生がおつしやつて」と言つて一息つき、「そこで、ある学生に出会いました」と彼女がそつと呟いた。どうも、彼女にとつて、この回想は辛そうな感じがした。別の話題を探そうとしたが、思いつかない。仕方がない、聞くしかないと決めた。

「男の征服欲の前に、泣き崩れるだけではなく、機知や爆発する怨念で対抗しようとした、ある意味しなやかな女性を語られたので、レディー・ファーストの国でもあり、数回の講演は好評を博しました。世界大会も無事に終わり、打ち上げのパーティがあつたんです」と多少歩く速度を落としながら、彼女が呟いた。歩いているこの場所は出島になつていて、丁度その西の端を回つて、昔住んでいたマンシヨンの影に入つた。入江の対岸、ひよいと手の届くようなところに、停泊している連絡船が見える。この入江を出入りする船のエンジン音は、結構喧しかったと何となく思い出していた。

「そのパーティで何かあつたとか……」と問うと、「いえ。そのパーティが終つてからです」と薄紫さんが言うのだった。「お酒が入っていました。先生の寝られる用意をして、自分の部屋に帰つたのですが、寝付かれなくて、外に出

たのです。ビックリしました、闇なんです、外は」と立止つて、彼女は入江の小さな波を見ている。

「アメリカの大学は広くて、木が多い。どういうわけか、構内に外灯が少ないんです。季節は丁度秋、昼間は紅葉が綺麗なのですが、この時間では『夜の錦』です。仕方ないなと思ひながらブラブラ歩いていると、バリトンの声が聞こえてきたんです。歌の題名は今でも分かりませんが、闇の中を低く漂いながら、柔らかなベルベット地の布で包まれているような、この上ない心地よさを感じたのです。酔い心地があつたのかもしれませんが。抑える気持ち湧いてこなかったのです。この声に恋をしてしまったのです」と一気に彼女は言い放つた。『声に恋する』とは人間世界ではどうだろうか。『声が良い』は分かる。しかし、『恋する』とまでは行かないだろう。恋にはいろいろな要素が絡まり合い、一つだけとは言い難いように思う。『ゴースト』の世界はやはり特殊なのだ。

「それで、どうしました？」と合いの手を入れながら、「どこで、コーラと繋がるのかな？」と考えていた。「そのバリトンの主が『そこにいるのは？』と歌を止めて言うのですが、胸がドキドキして言葉がでません。殿方と話をするなんて、それも闇の中で、話をするなんて。闇だから隠れて出来ることもあれば、闇だから怖くて出来ないこともあるものです。それに、私は初心な女でしたから」と言つて一息ついた。綱に繋がれて、静かに揺れている小さな船を眺めながら、薄紫さんはまた話始めた。

「あの美しい声を聞かせてくださつたお礼に、差し出すのが精一杯でした」「何を」と問うと、「紅の葉を一枚刺繍したハンカチです。渡すと直ぐにその場を離れて、自分の部屋に走つて帰りました。ベッドに入つてもドキドキして、なかなか寝付けなかつたものでしたね」と薄紫さんがはつきり答えた。小さな船の揺れが増したような気がした。それにしても『闇で分からず』『ハンカチを渡す』なんて、どうも理解しづらい。『ゴースト』の世界のことだ。

人間世界の常識は通用しないのだろう。

「ハンカチね。それにしても、渡しただけで相手が分からない。声だけでしょ」と言いながら、ゴラより、その声の主が誰なのか気になつてきた。「それが日の本に帰る日に分かるんです」と彼女が答えた。大きなマンシヨンに遮られて風のない所を、『錦江橋』の方に向つて歩いていると、数本の桜が植えられている所に出てきた。もう、赤く色付いた葉は殆ど残っていない。細い枝だけが何となく寂しい。

「数回の講演のたびに、最前列で熱心に聴いていた学生がいました。当時の『結婚制度』や『女性の職場』や『老齡となつた女性への対応』等々、おもしろい質問を紫先生にしていました。多少含羞^{ハニカ}んだようなトツトツとした喋り方が、誠実な人柄を感じさせました。何というたやろう？あの映画。船の舳先^{ヘサキ}で女性を後ろから抱いて、手を広げて二人で前を見据えていた男優の感じなのです」と静かに思いつめた様子で言うのだつた。どうも映画の例えが多いようだが、私はあの男優が好きになれない。詩人のランボーを演じた映画を見たことがあるのだが、役作りが粗雑で『乱暴』幻滅してしまつた。こんなことを言うと、薄紫さんが気を悪くしそうなので、黙つて先を促した。

「その学生とは話す機会があつたの？」と聞いて彼女の答えを待った。「いえ、二人で話す機会なんてありません。いよいよ帰る日を迎えるのですが、見送りの『ゴースト』の中にあの学生がいたのです。寄添うように栗色の長い髪をした女学生が傍らにいました。この女学生をその時まで見たことがなかつたのです」と彼女の声のトーンが一段と下がつてきた。もうすぐ『錦江橋』というところまで来ている。そろそろ、結論が出ないと、例会に遅れてしまう。先を急がなければと焦つてきた。

「それで、その女学生との関係はどうだつたの」とせかし気味に聞いた。「別に、そんな詮索はするつもりもないし、

帰る間際で出来ようはずありません。ただ旅の淡い思い出と考えれば、どうということもないのですが、一つ許せないことがあるんです」と薄紫さんが語気を強めた。どことなく彼女の眼が潤んでいるようだった。

「迎えの『雲』に乗る前に、乾杯をしようということになって、それぞれが飲物を持ちました。缶ビールありジュースあります。見るとあの学生は缶コーラを持っていました。傍らの女学生も同様です。乾杯の音頭で持っていた飲物を高く掲げた時、そのはずみで、女学生の缶コーラが溢れて、あの学生の服にかかりました。前にいたので、よく見えました。直ぐに、女学生がハンカチを出して、あの学生の胸の辺りを拭いたのです。紅の葉の刺繍がこんなにも鮮やかだったのかと思いました」と彼女は溜息混じりに言うのだった。

闇の中で、ただ『声』に恋した『薄紫』さんは純情この上ない人、いや『ゴースト』なのだ。その気持ちを踏みにじるなんて、あの『舢先男』は許し難い。同情の気持ちが湧いてきた。「それは残念」と言うと、ちらつと私の顔を見たかと思うと、多少トーンを上げて、彼女が喋りだした。

「あの声の持ち主とあの学生が同じだったのは、幸運だったと思うのですよ。だけど、貰ったハンカチを直ぐにあげてしまうなんてね。余りに実が^{ジツ}ないと思いませんか？貰う方も貰う方だと思うけど。あんな女性物のハンカチ、どうして手に入れたのか質問せーへんねやろうか。つまり、それだけ親密やといことなんやろうか。缶コーラはその反省材料。簡単に恋はしないといことの……」と私の顔を覗き込みながら薄紫さんは^{ぷつ}噴出した。「今までのことは全部、ツ・ク・リ・バ・ナ・シ」と元の低い声で言いながら、指をバチンと鳴らして、微笑むのだった。

『錦江橋』を渡りきった。信号を渡つて東に行けば、五分程度で『サンピア』に着く。「例会でしたね。間に合いますよね」と彼女が私の方を見つめた。やはり『ゴースト』よく分かっている。「大丈夫ですよ」と答えると「今日は内

編集模様

今号は、お正月を挟んで執筆の機会があり、たくさんの競演もいただいた。

もちろん早い方は11月の終わりには原稿を頂戴している。

掲載順は、原稿の到着順というわけではない。写真などが入っていると、流し込んだ位置から動かすと、大幅にレイアウトが崩れて、修正の手間がかかる事になるので出来るだけ避けている。

流し込んでから読み進んで、直していくが、商業誌ではないので、可能な限り執筆者の文面はそのままにしている。

「思う」「おもう」とか「行く」「いく」

とか表記に揺れがあつても、執筆者の意図的な場合

例会報告

いずれも場所は 兵庫県学校厚生会サンピア明石会議室 C

もある。明らかな助詞の誤りや漢字のミス等は気のつく限り訂正するが、お恥ずかしい事に私自身が判断がつかず、辞書で調べたり、ネットで確認したりする。

もちろん読めない漢字も多々あつて、鶉野などは、多分「ウズラノ」だったと思いつつ、改めて確認してフリガナを振った。

ワードでの提出が多いのだが、保存がワード形式でなかったり、横書きを縦書きにするので、再修正が必要になる。

改行やタブがあると、途中で切れる場合があり、それも訂正する。

さて、今号は、新しいプリンタを購入して印刷している。3年程度は持ちそうである。

「うむ：：どうやら20号までは行くか：」 亥



新年会は9名の参加となつて賑やかでした。高阪さんが「花見を」と言われていますので、またやりたいなあと思つています。是非参加下さい。例会報告は申し訳ありませんがHPでご覧ください。◆HPの掲示板に、高阪さん・夏子さんが例会報告や作品などの感想、また他の方々も感想などを上げて下さっています。ネットがご覧になれる方は是非一度覗いて下さい。また掲示板に書き込みもどうぞ。
<http://www.justmystage.com/home/actos2008/>

愛しき「モノ」達よ

柴小路 秀磨

僕は出掛ける時、免許証や家の鍵といったものとは別に、必ず身につけて行く、否、つけて行かねばならぬ「モノ」がある。左の胸のポケットにはいつもの万年筆、ズボンの右のポケットにはいつものライター、そして左の手首にはいつもの腕時計。この三つの「モノ」は、たとえ近くを散歩する時でも必ず身につけて行く。そしてたまの旅行や、桜、紅葉の

季節ともなれば、更に、愛用のカメラがこれに加わるのである。

これらの「モノ」は、就職して間もない一九七〇年から一九八〇年にかけて酒とギャンブルのできない僕が、その代償として買い集めたもので、中でも、特にデザインが気に入り、三十年以上使い続けている僕の愛用品である。世間ではそろそろ「アンティーク」と呼ばれる部類に入る代物である。これらの「モノ」がもつ共通点は、今の新製品に比べて随分と手間がかかることである。万年筆は、インクが切れると、ペン先を直接インク壺に

つつ込み、インクを吸引するわけだが、その都度、粗雑な僕はペン先にたまつたインクをうまく処理できずに、周辺にインク染みを残したり、ペン先を拭きとる際に必ずといっていい程自分の手を汚してしまう。こんな事もあつて、特にこの万年筆は妻に忌み嫌われている。ライターは蓋を跳ね上げると同時に親指の腹で石を擦り着火させるわけだが、旅行中、知らない間に石が摩滅しきつてしまい、予備の石を持ち合わせずライターが使えなかつたという経験もある。腕時計も自動巻であるから、使わずに置いておくとすぐ止まつてしまうし、半月に一度くらいはリユーズを持ち上げ、時刻の調整をせねばならない。それを怠っていると、予定の列車に乗り遅れるという失敗をひき起こすことにもなりかねない。特に手間のかかるのはカメラであつて、フィルム巻上げや巻き取りは手動であるのは言うまでもなく、いざ撮影となると、被写体や天候に合わせて、絞りやシャッター速度を自分で設定した上で、ファインダー越しに距離を合わせるという

作業を経てやつとシャッターを押すことが出来る。従つてとつさのスナップなどは撮れたものではない。



かくの如き僕の愛する「モノ」どもは、他人に言わせれば、誠に手間がかかり、不便極まりないものである。うが、僕に言わせれば、この「手間」こそが、僕と「モノ」との触れ合いを作り、その「モノ」への愛着を深めて行くことになるのである。「世話のかかる子ほどかわいい」というやつである。

これらの「モノ」は、もはや、僕にとつては自分の分身たるもので、もし、出かけた先で、これらのうちの一つでもいつもの所定の場所に納つていないことに気づいた時から、僕はもう不安に駆られ、何事にも集中できなくなってしまう。煙草もほとん

ど吸わなくなつた僕にとつて使う事もないライターであるが、いつもの場所にずしりと納り、ポケットに手を入れる度にその感触が指に伝わるだけで……、ボールペンに比べ使用頻度の減つた万年筆であるが、たまに取り出し、その黒光りした太めのボディを握るだけで……、毎日の着脱行為以外に触れることの少ない腕時計であるが、左手首にその重みを感じているだけで……、僕の心は安定するので。愛しき「モノ」と共に過ごせる悦びが得られるのである。

粗品として頂いたようなボールペンやライターはいつの間にか無くしてしまふが、愛する「モノ」は絶対に無くさない。ライターは二度ほど居酒屋に置き忘れ、万年筆は一度阪急電車の車内に置き忘れたことがあるが、その都度不思議と手元に戻つてくれる。勿論、その時、僕の必死の搜索活動があるわけだが。ただ四〇年近くの間使い続けるためには幾度かの修理を施している。その間数ヶ月の間は代用のモノで用を足すわけだが、修理を終え

て再びもとに戻つた時の喜びもひとしおである。修理にかかる費用だけで十分便利な新製品を手に入れることも出来るが、僕は一向にそんな気が起こらない。目新しいものより、変わらぬデザインをかたくなに守り続ける「頑固さ」が、僕は好きなのである。そして、これらの「モノ」は単なる美術品ではなく、使うことによつて人に慣れ、磨かれて行くのであり、人間の肉体同様、使わなければだめになつてしまふ。不便さを味わいながらも使い続けることによつて「モノ」は生き、美しさも楽しみを増してくるのである。僕はライターを使わんがために一日二、三本の煙草を止めるわけには行かず、万年筆を使わんがために原稿用紙に向かい、この拙い文章を綴っているわけである。

家に居着けない僕が、散歩の途中や旅先でふと出会つた絶景やその感動をカメラに収めたり、煙草をくゆらしながら思いをめぐらしメモを執る……。そんな至福の時を演出するための小道具の一つとしてこれらの「モノ」はある。この「モノ」に触

れることにより、その時々思いや感動は自分の中で再構築され、より明確なものとなつて、その喜びをもう一人の自分や他人と共有できるのである。

巷に氾濫する安価な新製品にはないアンティークのもつ魅力。美を求め時間をかけて丁寧に作られられたこれらの「モノ」は、営利追求や合理性、利便性の追求の精神とは全く無縁である。「人とのコミュニケーション」という素朴な価値観と喜びにあふれている。だからこれらの「モノ」を見る時、触れる時、ほつとした気持ちになれるのだろう。営利追求のために命を落としてしまうような社会、何か喪失感に駆られてしまう日々の生活、そ

んな中でちよつと立ち止まらせてくれる力がアンティークの品にはある。僕達が忘れてしまひそうになつてゐる多くのものをそれらが語つてくれる……。これがアンティークのもつ魅力であらう。

そして何よりも、永い年月使い込んできたという事実、その重みから醸し出される味わいと、それに染み込んだ肌の温もりが、僕の心を癒してくれるのである。

生涯手放す事のない我が愛しき「モノ」よ、
汝の名は、「モンブラン・マイスター」「ロレックス・デイトジャスト」「カルティエ・ゴールド」「ニコン・S3」。

競演 第六回

かん

かん、は『寒』とは限りません。「菅」「缶」「間」「感」……。このコーナーは工夫次第でいろいろと発想豊かな作品の舞台にもなります。

さざんかの咲くころ

永井組若芽

晩秋。初冬に向かうころ。庭木のさざんかが一輪一輪咲き始める。

他所のお宅の庭を眺めながら、また近くの公園などを散歩するとき、童謡『たき火』を口ずさむ季節だ。

小学1年か2年生の頃。私の手は、ひどい霜焼けだった。当時ピアノを習っていたが、暖房をする
と調律がくるうからと、寒い部屋で練習をしていたし、先生のお宅にも暖房はなかった。今ならエ
アコンを使っているのだが、せいぜい石油ストーブだ。

冷たい鍵盤を叩くのだから、霜焼けが切れて血が流れるということもあった。もちろん、他の人
がそのような状態ではなかったので、私の体質のせいだろう。

小学生なのに血流をよくするために病院から「ビタミンE」を処方してもらっていた。

『たき火』の歌詞にある「あたろうか、あたろうよ。霜焼けおててが　もうかゆい」の部分は、リアル
に実感できる。

でもその霜焼けおててが、よかつたこともある。

時々、駅から歩いて来られる小学校の校長先生に出会くと、手をつないでもらえたことだ。名
前も思い出せないけれど、大柄な方で仕立てのよいロングコートを着ておられた。上質のウールだ

つたように記憶している。

私の手があまりに冷たそうに思われたのか、手をつないでポケットに入れてもらえた。その先生は優しい感じの人だったので、子ども達にとっても人気があった。

私が手をつないでもらったら、もう片方の手を他の子がとりあいっこする。今思えばにぎやかな小学校の登校風景だ。

私は4月生まれということもあり体が大きく、クラスの人々からおねえさん扱いされていたせいか、先生に甘えることがあまり上手ではなかったが、このときばかりは、なかなかの特等席だった。

手袋をしていなかったのか？ とか、いくら冷え性だとしてもそれは年明け、2月の真冬のころで、咲いていたのは椿だったのかもしれないなあ、とおぼろげな記憶しかないのだが、手をつないでもらった感覚は、今も覚えている。先生の手は大きくとても温かかった。

さざんかが咲き始めると、冬が来るな、北風びーぷー 吹いてくるな、と散歩の足もスピードアップする。

歩いていても足元は冷え始めてる。早く帰って温かいものでも飲もう。



爛

大西隆史

鍋に水を入れ、コンロをひねる。チチチという音の後に、ボツと青い火が点った。かじかんだ手に息を吹きかける。白いもやが手を一瞬だけ包み込み、次の瞬間には周りの空気と同化してしまつた。

「おーおー、寒い寒い。」

誰が聞くわけでもないのに、ついつい独り言を言つてしまう。社会人になつて始めた一人暮らしも、同居人が増える気配もないまま早くも四年目を迎えてしまつた。

「しかし、今日は一段と底冷えするな。誰だよ、エアコンで暖が取れるなんていつたやつは。ちつとも効かねえじゃねえか。」

手足を摺り合わせて、音を立てないエアコンをちらりと見やる。エアコンの暖房機能は付いている間しか効かないし、その割に光熱費がかかると分かつて最近はずけていない。「最近のエアコンはすごいんですよ。光熱費も安いですし」なんて言つていた電器屋の兄ちゃんは、はたしてどうやつてこの冬を乗り切っているのか、なんて考えが浮かんだが、鍋の中の水から気泡が出始めているのを見て、あわてて火を弱めた。

「お湯の温度は五十度と。」

親父がよくいつていた台詞を口にする。親父は酒を爛するのが好きで、いろいろな酒を爛してみても、最適な温度はどうだと言っていた。「インターネットで調べればいいじゃないか。」という俺の言葉には、「やつてみなくちや分かんのだろ。人が書いたことが全て正しいとは限らんかな。」と言っていた。しかし、大抵はネットに書いてあることが正解だったので、そのうちある程度調べてからやるようになっていた。ただ、酒の温度なんてことにもこだわりを持って、それを実証して確かめてやるうという姿勢は、さすが理系出身だと思つたものだ。

お湯に酒を入れた徳利を入れ、電子レンジに作つておいたネギマを入れる。最初の頃は力を入れて料理もしていたが、だんだんとスーパードカンのお惣菜になつていった。会社の健康診断で若いのにコレステロールが高いと言われて、一念発起したのはいいが、結局のところ鍋一つでできる簡単な料理に収まつてしまつていた。電子レンジが動き始めるのを見て、隣の部屋のテレビをつける。一人暮らしで音がないのは、さみしさを増長させる。

「しかし、碌な番組やつてないな。」

落ちつける番組を探してみたが、あいにく自分の好みと上手くマッチングする番組はやつていなかった。最近は落ちつける番組探しも一苦労だ。仕方なくバラエティ番組をつけっぱなしにして、ぼーっと画面を眺める。キッチンの方から、電子レンジの回る音とともに、良いにおいが漂ってきた。「2分半……まあ、もういいだろう。」

キッチンの中、戸棚からお猪口を取り出し、机の上に並べる。徳利の温度はちょうどよいくらいになっていた。底を触つて、三秒我慢できるくらいと親父が口うるさく言っていた。ネギマもちょうど良い頃合いになっていた。

自分と親父とで似ている部分と、まるきり違う部分がある。親父は、一つの酒を延々と研究する性質だった。最適な温度は何か、時間は、容器は、付け合わせは、などとチェックしていき、お気に入りを見つけたというものだった。自分も、いろいろと研究するという点では似ているのかもしれないが、親父に比べて随分と浮気者だ。俺は条件を変えない状態で、いろいろな酒を試してみる。冷やしたときと燗した時で全く評価が変わるなんてことはざらにあるから、これはやめられない。俺は、本棚からノートを取り出して日付を書き込む。これも親父譲りの癖だが、飲んだ酒と感想を記入しておく。あとから見直すと面白い。

「で、今日が十五日だから……つと。しかし、結構増えてきたな。最初から何年だよ、これ。」

取り敢えず、ネギをつまんで口に入れる。行儀が悪いが、箸をくわえたままノートをめくる。一人暮らしだからこそできる技だが、注意してくれる母親の声も少し懐かしいと思つた。二度三度と噛みしめるうちに、ネギが程良く口の中でほぐされてくる。その時に本日一杯目を口にした。

「冷やの時よりも、燗にするとより香りが際立つ。やや癖が強い。ただ、なんとなく味がばけてしまっている気がする。」

ノートにさらさらと感想を書き込む。いっばしの評論家気分だ。そういえば、親父が書いたノートはどこへ行つてしまつたのだろうと、ふと氣になつた。遺品の整理の時に見た氣がするが、いまひとつ定かでなかつた。なんとなく、頭がぼうつとしてくるのが分かつた。

「母さんに聞いてみるか。」

今日は親のことを嫌によく思い出す日だ、とふと感じた。その後も、二本目、三本目と飲んでノートに書き込みをする。最初に比べて、だいぶ文字が揺れてきているのがわかつたが、直しようがなかつた。

「さて、これが本日最後か。」

四本目は今まで試したことのない一品だつた。「ダメとは思ふが、やつてみなくちゃわからない、つてね。」と心の中で勇氣づけてみる。いざつと一思いにおちよこの中身を飲み干した。そうして悟る。後悔は、先にできないから後悔なのだ。自分のノートに新しく一文が刻まれた。

「ビールは爛には向いてない。」

完



カン暇な老人の話

高阪博一

冷たい風がさつと吹きぬけた。ボールが外れた。忌々しい限りだ。この歳になって、こんな寒い思いをするなんて。何でこんなことを始めたのか、中村さんは恨めしげにクラブを見つめた。「ボール競技に向いてないのかな。運動神経がないのかな。それにしても、これって、運動神経使うかな。結局、プレッシャーに弱いということかな」と言葉がブツブツと飛び出してきた。

六十歳定年で、六十五歳までは働けたのだが、再雇用には応じなかった。三十八年間働いてきた。もう、八時間以上誰かに管理されるのはゴリゴリだった。裕福とはいいがたいが、それなりの蓄えと年金があり、扶養家族が妻だけになっていたことも理由の一つだった。別に悔いはなかった。すっぱりと辞められた。

趣味はなかった。時間があるのだから、考えれば今までと違う何かが見つけられると思っていた。昔の上司や同僚など、辞めた会社の関係者と付き合う気はサラサラなかった。昔の関係を蒸し返しながら回顧談だけで、年寄りが交わっているのは、『往生できない幽霊』のように思われてならなかった。だが、グズグズしていても、時間は過ぎて行く。あつという間に、一年が経っていた。

たまたま、ぼんやり見ていたケーブルテレビに、このクラブが紹介されていた。若造りの女性が「このクラブは会員が若く明るく和氣藹々と活動しています」と一寸硬い笑顔で答えていた。和

氣藹々という常套句にはウンザリだったが、「若く」に引かれた。

焦っていたというのも事実だった。当初は何も言わなかった妻も、「外へ出て、お友達でも作ったら」とか、「最近、肥えたよね」とか、チクリチクリと言いつつ出していた。兎に角入会した。それで驚いた。あの「若く」には「かつて」という副詞が欠落していた。どう見ても自分より年上ばかりで、自分が『ピカピカの一年生』と中村さんには思えてならなかった。

「ナーチャン、いつまでたつても、上手ならんなあ」と井上さんが傍で囁いた。彼はこのクラブの先輩で、年齢は満七十歳、長身で痩せていて、ヒップボーンのGパンがよく似合うタイプだ。上着にしてもグレー系統ではなく、ネイビーブルーのものを好んで着ているようだった。「このクラブの難点は若い人が入つてこないことや。まあ、若い人は来るわけないけど……。それにしても、女の人は元氣やわ。ほとんど、年上やのに、あのはしやぎよう」と前の方に行く何組かを眺めて、呆れたように呟いている。

「まだ、一年足らずやから仕方ないかも。あんまり早く上手くなつたら、わたしら何や!と言われそう、ねえ、イーサン」と今度は山田さんが口を挟んだ。彼は六十五歳、やはり、井上さんと同じようにこのクラブの先輩なのだが、もう三年が経過しているとかで、なかなか上手い。それほど経験の必要性を中村さんは感じないのだが、終つてみると、山田さんが勝つてることが多かった。

山田さんは先輩の井上さんに、終了後のコーヒーをよく奢らせていた。「これ、ほんと、美味しい

わ。だけど、最近、メ・タ・ボ」と目立ち始めたお腹をさすりながら、飲んでいるのを見て、「同じ頃に始めたのに、やつぱり歳の差やなあ。そやけど、ヤマチャンの数値上げるのも、程程にせな、奥さんに怒られそう」と井上さんが楽しそうに言い返しているのを、しばしば中村さんは見たことがあった。

中村さんが外しており、残る井上さんと山田さんが入れたので、結局このホールは中村さんの負けになった。「あと、二ホールか。また、今日も負けそう」と多少悲しそうに中村さんが呟くと、「ナーチャン、いつものこと。泣かない、泣かない。なあ、ヤマチャン」と井上さんの声が背後からして、「まだ、二ホールあると、アグレッツシブに考えな……。ねえ、イーサン」と山田さんの答える声があった。

三人は新たなホール立つて、次々に第一打を放った。井上さんはやや右側、山田さんはほぼ真直ぐ、中村さんはど真ん中で一番距離が出ていた。すかさず、「上がって、なんぼ」と山田さんの声が飛んできた。「ヤマサンは私より二年先輩で上手いもんなあ」と中村さんが言うと、「私にはこれしかないもんね」と山田さんが悪戯っぽく答えた。

中村さんは山田さんと喋るのが好きだった。出身が同じ大阪で、何処となくノリがいい。いつもは吉本ギャグや冗談を言い合っているのだが、時として、真顔でぐつと惹きつけられることを山田さんは言うのである。「あの首相、無責任や。もつと現実的にならな。政治つて、理想は大事な要素の一つやけど、理想でメシは食えんよなあ。それに、あの人、自分が一番可愛いんやで。無理やなあ」と一年ほど前にふと言ったことがある。あの首相は既に過去の人となり、今は以前「カイワレ

」を食べていた人が首相になつてゐる。この首相もゴタゴタが絶えないようで、先行きはどうも覺束ない。

三人はそれぞれのボールの方向に歩き出した。同じ方向に歩き出した山田さんが「ナーチャン、仕事見つかつたん？」と聞いてきた。「まだ、見つかりません、ヤマサン」と答えて、続けた。「シルバー人材センターも大変みたいですね。求職者は多いのに、求人数は少ない。それに、若い人があれだけ就職でけへんから、当然でしょうけど」と中村さんが落胆口調に言いながら、山田さんの方を見た。

「時間が有り過ぎる。何かに使えたら」と言つていた中村さんに、山田さんが「働いたら」とアドバイスを数ヶ月前にしたのだつた。「ナーチャンは働くの嫌イヤタイプだから、あんまり勧めへんけど、一日何時間か、一週間に何日か働いたらどうかなあ？年寄りの働き口はしれてるつて。責任のある仕事や、上司に四六時中見られてゐるそんなエライ仕事はないつて」と言われたのだつた。

まず、職安に行つてみたのだが、そこはラッシユ並みの混雑だつた。退職後時間も経つており、この就職難の時代に、年寄りを相手にするところではない。職安は諦めた。それで、近所の「シルバー人材センター」に行つたのだが、今のところは案の定という感じであつた。登録はしたのだが、何の連絡もない。「家でジーとして、テレビだけが友達というのもなあ。週に一回のこのグランド・ゴルフだけやないか」となつてしまつてゐた。

あの退職時、仕事はしない、趣味を見つけると考えていた。ゴルフは金がかかる、読書は何を読

んだら良いのか分からない、ボランテアは仲間同士で、過去の肩書きが優先しているようで嫌だった。結局、中村さんは趣味を見つけられずにいた。入ったこのグランド・ゴルフが趣味になるかと言われると、多少首を傾げなくなる。しかし、気の合った人と、週に一度でも話が出来るのは楽しいことであった。

向こうの方で、井上さんが手を上げて「打つで」と大きな声を出して、ボールを打った。ボールに向つて転がつていったが、弱かったの
で、五十センチ程度手前で止まつてしまった。「もう一寸、やったのに」と残念そうな井上さんの大きな声が出た。「先に打つで」と今度は山田さんの声が出た。ボールが勢いよく弾んで転がつていく。「そんな、転がらなくても」落胆の声が聞こえたかと思うと、ボールを一メートル弱オーバーして止まつた。

次に、中村さんが構えた。ちよつと深呼吸をしてから、打ったボールはボールを目掛けて一直線に転がつていく。徐々に弱くなつてボールに収まるかと思つた瞬間、ピタつと止まつてしまった。もう、数センチのところだつた。「また、石や」と悔しそうに中村さんが言うのと、「しつ、しつ、しつ、止まつた島倉千代子。人生いろいろ、小石もいろいろ」と山田さんが可笑しそうに声を上げた。

「それも言うなら、とつ、とつ、止まつたトニー・レオンでしょう。ヤマサン」と中村さんが返すと、



「トニー・レオンか、レッドクリフやね。あの映画、迫力あつたね。そや、丁度、三人揃つてるやん。そやけど、一人足らん、孔明が。まあ、これだけの三人が揃つてるから、軍師なしでも、何でもできるわ」と笑い声が聞こえた。結局、このホールはそれぞれが第三打をボールに収めて、優劣はつかなかった。

「さあ、最後や」と井上さんが言つたのだが、前の組が打つのを待つていたので、三人は傍らのベンチに坐つた。そろそろ午後の三時頃になつていた。風は更に冷たくなつてきた。紅や黄色の落ち葉が辺りに散らばつてゐる。既に冬が始まつてゐるのが分かる。今年、紅葉を見に行かなかつたことを中村さんはふと思ひ出した。「そう言えば、去年も行けへんかつたなあ」と心の中で呟いた。

「今日は一寸寒いけど、今年の冬はきつと暖かいよ」と井上さんが誰に対してもなく言つと、「そら、イーサンの期待だけですか」と山田さんが応じた。「天気予報を見てないな。まあ、それはそれとして、老人、いや昔の青年にとつては、冬の暖かいのは有難い。風がきついと、このグラランド、ゴルフ、まるで、耐寒訓練やもんね」と井上さんが答へた。

「寒くて中止になつたら、会えませんものね。週に一回はイーサンやナーチャンに会いたいもんな」と山田さんが言つと、「これ以上、コーヒーを奢つてたら、破産するわ。会いたない、会いたない」と井上さんが笑いながら言葉をつないだ。「あ、前の組、終つたみたい。最後ですよ。頑張りますよ」と中村さんが言つと、「打つ前に、力、入れ過ぎ。なーあ、ヤマチャン」と井上さんが言い、山田さんが首を前後に緩く動かして、同意を示した。

最後は三人とも四打で終った。井上さんと山田さんの賭けはイーブンで勝ち負けなしに終ってしまつた。「残念、今日こそ、美味しいコーヒーを飲もうと思つたのに」と井上さんが言つたので、山田さんが「今日は奢ります」と三人分のコーヒーを買つてきて、それぞれに手渡した。「そしてら、反省会、しようか。車にどうぞ」と井上さんが言うので、道具を片付けて、熱い缶コーヒーを両手で挟みながら、三人は近くに停めてあるワンボックスカーに向つた。

反省会と言つても、グラランド・ゴルフについて何やかや話すわけではない。いま、家に帰つたとしても、夕食まで間がある。「えらい、早いね」と三人とも言われるのである。この言葉が微妙に気持ち逆撫でする。それが嫌で、ジャスト・タイミングを見計らい、ここで、時間を調整するのであつた。だが、中村さんにとつて、この時間が最も楽しい時間になつていた。どうも他の二人も同じようだった。

「まだ、ナーチャン、仕事が見つからんみたいですよ」と山田さんが坐るや否や言い出した。「シルバーも仕事ないわな。ナーチャンはそれ程仕事したないタイプだから、丁度ええんと違う？」と井上さんが言つて、缶コーヒーをごくりと飲んだ。「それに、ナーチャンは趣味を見つけないアカン、見つけなアカンと言つてたな。そんなに、趣味つて必要か」と言われた中村さんは、「時間がありませんやん」と井上さんに応じた。

「あと、たかだか生きてても、二十年やで。そんなに悩まんでも……。趣味がないのも俺の生き方と思はな！ ジーとして、テレビとお友達になるのも生き方の一つ。いつまでも、若い女の人を追い続

けるのも生き方の一つ。なーあ、ヤマチャン」と井上さんは山田さんに話を振った。「イーサンは口だけで、身体がついてこん、若い女一筋^コ。まあ、それはおいしい」と笑いながら言つて、中村さんの方を見た。

「ナーチャン、真面目やかから肩に力が入るねん。丁度、ボールを打つ時みたいに。どうして、テレビ見るのも趣味やと思わんのかな。思い難い^{ニク}かも知れんけど、思いようと違ふかな。仕事はお金を貰う、趣味はお金を払う。その払うお金の換わりに、残り少ない貴重な時間を払つてゐるつて考えたら、テレビを見るのも趣味やろ」と山田さんは続けた。「回りを気にし過ぎ。俺の時間や、文句言ふな！くらい、奥さんに言うてみ」と今度は井上さんが口を出した。「そんなこと言つて、イーサン、よう言うんですか？」と中村さんが言つと、「そんな怖いこと、よう言わんわ。なあ、ヤマチャン」と同意を求めるように、山田さんの方を見た。「僕も無理、イーサン」と山田さんが答えた。三人はお互い顔を見合わせた。途端に、「プー」と三人とも、笑い声を漏らしていた。「まあ、オチもついたところで、今日はこれぐらいに。またの逢う日を楽しみにということ」と井上さんが二人に話しかけた。

「それじゃ、また」と残つていた缶コーヒーを飲み干して、二人は井上さんの車を降りた。「また、来週ですね」と中村さんが言つと、「日本の人口つて一億二千人やつたかな。それだけの数の人生があるつて言うことやん。つまり、『人生いろいろ、趣味もいろいろ』ちゆうことやん」と山田さんが微笑みながら話しかけてきた。「ほんまですね」と手短に中村さんは言つて、停めてあつた自転車に

乗った。

「来週、温ヌクかつたらええのになあ」と言つて歩き出した山田さんの後姿を見ながら、帰る方向にハンドルを向けて、中村さんはペダルを踏んだ。沈んでいくオレンジがかつた陽が丁度真正面に見えた。風がフオローに変つていく。徐々に加速しながら『今日もあの夕陽に向つてダッシュだ！』なんて言うのと、再放送のTV番組みたいと誰かに言われそうやなあ」と中村さんは笑つて、一人ツツコミを入れていた。

了

感謝

大西裕子

先生という職業は大変だと、自分自身が“先生”になつてから三年目にようやく自覚した。今までは学生という、ただ与えられる環境や行事を享受している立場だったが、自分が環境を整え、行事を計画する側になるとその大変さが実感できた。

幼稚園で遠足などに行くと、子ども達を引率する大変さが身に染みた。行事の計画から下準備にプリント配布、下見、打ち合わせ、当日準備：やらなければならないことが山のようにあり、連日残業が当たり前だったことも初めて知った。当日は当日で子ども達の怪我や迷子に気を付

け、一時として気が抜ける瞬間がなく、園に戻つて子ども達が降園すると溜息が出てきた。一日：否、数時間の遠足でこれだけ疲れるのなら、小学校や中学校での修学旅行や自然教室での先生方の疲労や負担はどれほどだったのだろうかと考えた。

時に幼稚園の倍以上の人数を一泊以上引率する大変さ。計画、下見、プログラム、当日の引率状況等の確認など仕事は山のようにあるだろう。実際に、私自身も先生という立場になつて遠足等の行事にこれだけの労力と時間が費やされていたのだと初めて知つた。それと同時に、これだけの事を私達にしてくださつた先生方に感謝を覚えた。特に宿泊などになると生徒の部屋割から夜間の見回りなどもあり、先生方は満足に睡眠もとれなかつたのではないだろうか…。

また私が学生の時は先生が自分の顔と名前を覚えていることは当たり前だと思つていた。なので自分が質問などをしに行つて、先生から自分の名前が出ないことに怒りを覚えた記憶があるが、もしもその頃の自分に会えるなら過去の自分を殴りたい。

学生が先生一人を覚えるのと違い、先生は生徒全員の顔と名前を覚えなければならない。中学や高校では授業でしか会わない先生もいたので、その先生が顔と名前を覚えるは大変だろう。実際、私も毎日顔を見ているクラスでも完璧に顔と名前を覚えるのに二週間近くかかつた。なので週に数時間しか会わなかつた先生方は私達の顔と名前を覚えるのに苦労されたと思う。それでも先生方は頑張つて覚えてくださった。そして、先生方が私達の顔と名前をしつかり覚えて読んでくれているからこそ、私は認められて、受け入れられていると感じて学校生活を送ることが出

ファックス / 078-918-5965

◆パソコン用HPに掲示板を作成しました。ご利用ください。

編集室から

次号(第10号)は原稿締め切りは3月末。

◆10号、一つの区切りです。「3号雑誌」というお話しをしたことがあります。同人グループで雑誌を出そうという話になつても、3号まで出すとダウンするのが多いと言うことです。「1号で終わった」などという事も珍しくない世界です。今回で、9号まで来ました。みなさん良いものを書いて下さい。なんとか10号を出し終えたいと思います。

◆競演第7回 今回は、「だん」とテーマを決めました。「暖」「弾」「壇」「男」「断」とまあいろいろ考えられます。

◆入会するには◆

①会費1年分(12000円)を下の振込先に振り込み

②〒・住所・氏名(フリガナ)・年齢・職業

を明記の上、※振込用紙の通信欄記載でも可

〒673-0031 明石市宮の上1の17の614

大西方 アクトス編集室 へ、お送りください。

◆会費等振込先◆

郵便局

口座:00900-5-39616 大西 生一朗

※記録が残りますので、振り込みして下さい。

◆合評会 毎月第二土曜日

※午後 3時～5時

◆場所 サンプピア明石

☎673-0882

明石市相生町2丁目9番20号

TEL (078) 911-2250(代表)

FAX (078) 913-1140

JR・山電明石駅から南東へ徒歩約10分

市バス「保健センター前」下車すぐ

立体駐車場有(有料)

◆四月からは衣川コミセンです。

アクトス 第9号

平成二十三年二月一日

編集 大西亥一郎

発行

673-0031

兵庫県明石市宮の上一の十七の六一四

大西方

大和評論社 「アクトス編集室」

Tel&Fax 078-922-4562

actos2008@mbe.nifty.com

非売品(頒価)500円